

## 事業成果報告書

1. 個人または団体名(団体の場合は代表者名も記入)
北村 文
2. 研究または活動のテーマ(課題名)
<メイドさんのいる暮らし>のジェンダー論的研究: シンガポール在住日本女性の移住家事労働者雇用経験がしめすもの
3. 助成額
200,000 円
4. 実施期間
2017 年 7 月 ~ 2018 年 6 月
5. 実施状況
<p>2017 年 7 月~ 文献渉猟</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●グローバルシティ、ケアワーク、移住家事労働者についての理論的研究</li> <li>●アジアにおける再生産労働のグローバル化についての経験的調査研究</li> </ul> <p>2017 年 7 月~ 資料収集</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●シンガポールの「外国人家事労働者」制度について</li> <li>●日本の「国家戦略特別区域家事支援外国人受入事業」制度について</li> </ul> <p>2017 年 9 月 インタビュー調査(シンガポール)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●シンガポール在住で移住家事労働者を雇用したことのある日本女性 7 名に実施</li> </ul> <p>2017 年 10 月~ インタビュー調査(国内)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●シンガポール在住経験・移住家事労働者雇用経験のある日本女性 5 名に実施</li> </ul> <p>2017 年 10 月~ インタビューデータ文字起こしおよび分析</p> <p>2018 年 1 月~ 上記文献・資料・インタビューデータに基づく学会報告・論文の執筆</p>
6. 事業成果と自己評価
<p><b>1. 事業成果</b></p> <p>本事業においては、「グローバルなケアの鎖」(Hochschild 2000)に焦点を当て、理論的・制度的な考察を行うとともに、なかでも再生産労働のグローバル化がいよいよ進むシンガポールにおいて、日本の女性たちが何を経験するのかをフィールドワークから明らかにすることを目指した。まず理論的には、トランスナショナルなケアの外注が富める国と貧しい国の女性たちに「ウィン・ウィン」の関係をもたらす、というネオリベラルな通念を覆し、実はグローバルな不平等と性別分業の構造が再生産され続けていることを確認した。これはすでに国策として移住家事労働者の「輸入」「輸出」を行うアジアの国々においてだけでなく、新たに「国家戦略特別区域家事支援外国人受入事業」を導入する日本においても同様である。</p>

次に、こうした制度を実際に利用し雇用主(「マダム」となった女性 12 名へのインタビュー調査をシンガポールと東京で実施し、彼女らの語りを分析した。調査協力者の女性たちのあいだには、年齢や家族構成、就労状況、シンガポール滞在の期間や理由などの多様性があり、それゆえに「メイドさん」雇用が彼女らにもたらすものも様ではない。たとえば「メイドさん」たちは、いっぽうでは、海外で家事、育児そして仕事をするうえで必要不可欠な存在であると語られるが、他方では、言語や習慣の違いからさらなるストレスをもたらす存在としても語られる。いずれの場合にも家事労働者雇用にかかわる物理的・精神的な負担は女性に課されることが多く、女性たちは日々の家事育児からは解放されても、新たに「マダム」としての役割を背負うことになる。同時に、彼女らの不満や不安は往々にして「外国人」である移住家事労働者たちに向けられ、その語りのなかには人種や階層のステレオタイプが含まれることもあった。すなわち「マダム」たちも「メイド」たちも、人種とエスニシティ、階層、ジェンダーの構造のなかにいっそう強固に組み入れられる様態がみてとれたのである。

本事業の成果のひとつとして、以上の知見を 2018 年度日本女性学会大会(2018 年 6 月 3 日、武蔵大学)において発表した(<http://joseigakkai-jp.org/wp/wp-content/uploads/2018/04/news143web.pdf>)。「『家事支援外国人』と『メイドさん』のあいだ——移住家事労働者雇用の多元的言説分析」と題する報告では、日本の行政およびメディアがもつぱら「女性活躍推進」の手段とみなす移住家事労働者雇用が、いかに被雇用者の女性たちのヴァルネラブルな状況におくものであるか、そして雇用者の女性たちに新たな負担や苦悩、葛藤をもたらすものであるかを、独自の多元的言説分析から論じた。

## 2. 自己評価

本事業の一義的な目的は、すでに多くの問題が提起されている「グローバルなケアの鎖」のなかに、日本の女性もまた組み込まれて始めているという事実を明らかにすることであった。文献渉猟および資料収集に加え、実際に典型的なグローバルシティであるシンガポールにおいてインタビュー調査を行ったことで、個別具体的な経験の語りの分析が可能となった。特に、移住家事労働者の雇用主である「マダム」については、一面的に搾取者・虐待者として描かれることが多いなか、彼女らの苦慮や葛藤を彼女ら自身のことばのなかに見とったことは有益であったといえる。また、インタビュー調査のなかでは、グローバルシティに住む日本の女性たちが自ら情報交換・意見交換のための場を構築しつつあることも明らかになった。今後はこうした女性たちのネットワークに着目し、そこにどのようなフェミニズムの含意があるのかを追究していきたい。

このように当初の研究目標を達成するとともに新たな研究テーマの萌芽もみることができたが、しかしながら、その成果のアウトプットはいまだじゅうぶんではない。今後、分析と議論をさらに発展させ、英語および日本語での論文執筆・学術誌投稿につなげていく。また、シンガポールでの調査では時間的制約もありインタビューを実施するのみであった。今後はよりエスノグラフィックな研究へと発展させるべく、たとえば個人宅やプレイグラウンドといった、「メイド」「マダム」たちの生活の場、ケアワークの現場にも足を踏み入れていきたい。

なお本事業は、当初の計画から 1 年遅れて実施することとなった。個人的な事情に対してご高配をいただき、計画変更をお認めいただいたことに、深い感謝を記したい。

### 文献

Hochschild, Arlie Russell. 2000. "Global Care Chains and Emotional Surplus Value." Pp. 130-146 in *On the Edge: Globalization and the New Millennium*, edited by T. Giddens and W. Hutton. London: Sage.